

「全鍍連」 2019年 11月号 理事長のよこがお

埼玉県鍍金工業組合 理事長 黒澤 久

「組合って何？」



先ずもって前期全鍍連経営委員長を務めさせていただき、役員の皆様、経営委員会の皆様にお世話になりました事、改めて感謝と御礼を申し上げます。その経営委員会事業で女性部のパワーの強さそして青年部の活力ある行動に触れさせていただき鍍金業界もまだまだ捨てたもんじゃなく未来への明るさを感じさせて頂きました。今期の経営委員長には私ども埼玉県鍍金組合副理事長の吉田幸司が務めさせていただきます。私同様に全鍍連の皆様のご指導ご協力をお願い申し上げます。

さて、埼玉組合の現況ですが他の組合と同じように組合員の減少に頭を痛めております。平成元年、30年前の160社の組合事業所から、現在半減しております。

その様な事情を考慮して、昨年の総会で組合運営の簡素化を図る為、定款の変更を承認いただきました。そして今年の総会では、7支部体制から、それぞれ支部の活性化を求めて県央・県南・県西・県北と4支部体制への再編も承認して頂きました。2年がかりでこの2つの大きな改正をさせて頂きました。

其れと言うのもこれから10年先、更には将来に渡り組合員の減少は避けられず、資金的なことも含めて事業活動が大変な時期に入ることが懸念されるからです。当組合でも近い将来には賦課金の増額と言うことも視野に入れて今後の組合運営をしていかなければならないと感じているところです。

その為には改めて組合の存在意義を確認する時期ではないでしょうか？全鍍連の新会長山田登三雄氏は全鍍連の意義をこの様に語っております。「各都道府県の場合は都道府県の環境局等の繋がりがまだだが、全鍍連の役割は全国と同業者仲間との情報交換と国の経産省等の繋がりを強くしていくことである」。又、青年部についても「次代のめっき業界を担う青年が全鍍連のネットワークを使い、一緒になって飲みニケーションも含めて研鑽していく中で悩みを話したり相談することが最終的には自分自身の自信となっていける事が、最大のメリットである」と。

話は変わって、組合員が減少していく中廃業ならば仕方ないですが、事業を継続しているにもかかわらず組合を退会する事例が多く見受けられます。

埼玉県の組合でも会社は続けるが組合はメリット無いので止めるとの事。私はそれらの経営者の方にこんなお話をさせて頂いております。「組合は公害防止を最大目標の一つとして排水分析事業を行っていますし、全鍍連においては各都

道府県の意見を集約して排水基準の暫定延長などを経産省と掛け合っている。全鍍連の全国の役員の方々は毎年大変な労力を使い、現在もこれからも更なる気を遣い、時間を使い、お金を使いめっき業界の為大変な苦勞をされている」と言う。「組合に入っていないでも同等基準なのだから組合には入らなくても良いんだ」えっ？あまりにも自分勝手な考えで、返す言葉も失ってしまう。言うてはいけないかも知れませんが、全鍍連から国の方に要請をして排水基準規制は組合に入っていない非組合員はこの基準、組合活動で努力されている組合員は少しでも基準を緩くしてもらうなど出来ないものでしょうか？

全国には、めっき事業所で非組合員アウトサイダーは想像ですが2000～3000社は存在すると思います。それらの事業所に組合のメリットを明確にして勧誘できれば組合員減少対策にもなると思います。大変にきつい文面になってしまいましたが将来のめっき業界を思つてとの事でお許しを頂ければ幸いです。

最後に、有識者の言葉ですが「今、組合員は共同事業によるスケールメリットよりも個々の企業の強化を求めている」とし駅伝に例えています。「走るときは一人だから自分を強くしたい。でも己を鍛える過程は、皆＝組合の力を借りたい」。まさに駅伝のチームワークは、組合の相互扶助精神に通じるところがあると思います。